No.10
2025年9月30日

Newsletter

日本遺伝性腫瘍学会／The Japanese Society for Hereditary Tumors

目　次

学会理事体制
理事長退任にあたって…… n1
新理事就任のご挨拶…… n1
役員一覧…… n2
学術集会開催報告
第31回学術集会を終えて …… n3
学術集会トピック＆感想 …… n3
お知らせ …… n5
編集後記 …… n5

学会理事体制

❖理事長退任にあたって

ー不易流行ー

第4代理事長　石田　秀行
埼玉医科大学総合医療センター　消化管外科 / 一般外科

今年 6 月をもって、一般社団法人 日本遺伝性腫瘍学会の理事長を退任させていただきました。もとより浅学菲才の身でありながら、名誉理事長・名誉会員・特別会員・評議員・一般会員各位の多大なるご指導・ご理解・ご協力を賜り、任期を全うすることができたのではないかと愚考いたします。この場をお借りして、謹んで御礼申し上げます。

私は 2012 年から理事、2018 年から副理事長、2020 年から理事長を拝命しました。この間は本学会のまさに激動期で、改革の連続であったと思います。アンジェリーナ効果やがんゲノム医療の幕開けが本学会の発展の後押しとなったことは言うまでもありません。

理事長を拝命した際には、大袈裟に申し上げると、「他学会に類のない独創的な事業の展開」を目指しました。専門医制度、遺伝性腫瘍セミナーの開催、各種教育的コンテンツ等の整備・発展や、社会貢献・診療への提言等については、実際に行った諸事業の足跡の中にその一端が垣間見えているのではと思います。きわめて短い準備期間しかなかったものの、『遺伝性腫瘍専門医テキストブック』『遺伝性腫瘍ケーススタディ 100』『遺伝性腫瘍症候群に関する多遺伝子パネル検査 (MGPT) の手引き 2025 年版』の刊行等は、今後のわが国の遺伝性腫瘍症候群の診療の大きな礎になったことと思います。

今年の理事長講演でも引用させていただいた、松尾芭蕉の「不易流行」の概念は、医学の真髄に通ずるものです。これを本学会に当てはめれば、「Germline に端を発する腫瘍発生のメカニズムを探求し続ける」＝不易と、「日々更新される革新的イノベーションを利用した研究・診療の進歩と遺伝性腫瘍症候群当事者への還元」＝流行になるかと思います。

第 5 代理事長となる平田敬治理事長は、傑出したご見識・調整能力をお持ちです。平田理事長の強力なリーダーシップのもと、理事・会員諸兄が、本学会の発展に邁進されていくお姿を心に浮かべますと、今から楽しみで仕方ありません。

あらためて、長い間本当にありがとうございました。

❖新理事就任のご挨拶

▶第５代理事長

平田　敬治
産業医科大学　第1外科（消化器・内分泌外科）

2025 年 6 月の社員総会において承認いただき、本学会の理事長を拝命いたしました平田敬治でございます。初代理事長の宇都宮譲二先生から始まり、その後、樋野興夫先生、冨田尚裕先生、石田秀行先生、と受け継がれた重い襷を背負うこととなり、改めて緊褌一番、学会発展のために尽力させていただく所存です。

本学会は、大腸癌研究会の中で発足した遺伝性大腸癌の研究グループを基盤として，1994 年に日本家族性腫瘍研究会として始まり、その後 2005 年より日本家族性腫瘍学会として、さらに 2019 年より「一般社団法人 日本遺伝性腫瘍学会」として現在に至っております。昨年、2024 年には仙台での学術集会開催期間中に本学会の 30 周年記念式典が開催され、これまでの歴史を振り返るとともに、新たな未来へ踏み出そうとしています。

改めて、本学会の定款を読み返しますと、その目的に「家族性あるいは遺伝性腫瘍に関して、その実践と教育・研究に貢献することを目的とする」と記されています。この中にあります「実践」とは、「教育・研究」によって得られた成果の当事者への還元にほかならないと考えます。そのためには医療従事者のみならず、研究者・行政・民間企業、そして何より当事者も参加する本学会の特徴を活かし、さまざまな社会的問題も克服でき得るような活動が必要と思われます。

がんゲノム医療の急速な発展に伴い、遺伝性腫瘍に関してもその注目度が高まり、本学会の会員数も飛躍的に増加し、2025 年 5 月の集計では 2,300 名を超えまし

た。遺伝性腫瘍の診断は、医療面接（家族歴聴取）や表現型（臨床的特徴）の把握が基本であることに変わりはありませんが、その遺伝学的診断については保険・自費診療が混在し、そのハードルはいまだもって高く、また、臨床試験や“in house”での遺伝学的診断については、その精度管理・一般診療への応用など、問題が残されています。一方、当事者にとっては、その表現型が多臓器・多領域にわたる場合、地域によってはマネジメントしていただく遺伝性腫瘍に通じた専門医やカウンセラーへのアクセスがいまだもって十分ではありません。

このような課題を克服すべく、学会の基盤強化を図り、そのうえで医療従事者の教育・育成、ガイドラインの拡充等による情報発信、レジストリ制度の確立、政策提言等々を進め、ひいては当事者への適切な医療の提供につなげるべく、本学会の役員・評議員、そして会員の皆様とともに、万里一空の精神で学会の発展に努めてまいりたいと思います。

会員の皆様におかれましては、なお一層のご理解とご協力、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

▶副理事長

下平　秀樹
東北医科薬科大学医学部・腫瘍内科学教室

このたび、一般社団法人 日本遺伝性腫瘍学会の副理事長を拝命致しました。平田敬治新理事長のもと、学会の発展および遺伝性腫瘍にかかわる診療の拡充を目指し、微力ながら貢献したいと考えます。本年度は、長年理事を務められた先生方が多数抜けられたため、理事の構成が大きく変わりましたが、これまでの学会運営をある程度知る者として、諸先輩方の思いを引き継ぎつつ、新たな発展を目指していきたいと考えます。

私はこれまで、会則委員会、編集委員会、専門医試験小委員会に所属し、とくに編集委員会では委員長、担当理事を務めてまいりました。また、2024 年に記念すべき第 30 回の学術集会を仙台で開催させていただき、多くの会員の皆様と交流をもつことができました。

近年、がんゲノム医療が始まり、生殖細胞系列所見の確認検査や血縁者の検査、未発症病的バリアント保持者のサーベイランスなどの依頼が増えています。しかし、いずれの診療においても保険適用がないことが大きな障壁となっており、学会が要望を発信し続けること、さらに発信力を高めることが必要と考えます。また、会員数は右肩上がりで遺伝性腫瘍専門医・指導医数も増えており、着実に学会は成長しておりますが、客観的評価を得るために国際化などの推進が必要と考えます。平田理事長をお支えしつつ、これらの課題に対して少しでも貢献できれば幸いです。

会員の皆様のご健勝を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

▶副理事長

山口　達郎
がん・感染症センター 都立駒込病院　遺伝子診療科

このたび、一般社団法人 日本遺伝性腫瘍学会の副理事長を拝命いたしました山口達郎と申します。身に余る重責ではございますが、先達の多大なるご尽力により築き上げられた本学会がさらに発展し、次の世代へと着実に継承されるよう尽力してまいります。

本学会の前進である家族性腫瘍研究会が発足して 30 有余年。その間、遺伝性腫瘍を取り巻く環境は大きく変化してきました。とくに、がんゲノム医療およびコンパニオン診断薬を用いた個別化医療の普及に伴い、近年、遺伝性腫瘍医療への関心は高まっております。遺伝性腫瘍の正確な診断と適切なサーベイランス、そして当事者に寄り添う包括的な支援体制の整備が今後ますます重要となります。また、次世代を担う医療者の育成や社会への理解促進も重要な使命であり、診療指針の整備、行政・関連団体との連携など、学会として果たすべき役割はますます重要性を増しております。さらに、海外の研究者との交流を通した本学会の国際化も極めて重要な課題です。

本学会の目的である「遺伝性腫瘍の実践と教育･研究への貢献」を肝に銘じ、時代に沿った期待に応えられられるよう、理事長はじめ役員の皆様方と協力しながら実りある活動を推進してまいります。会員の皆様におかれましては、ご経験と専門性を通して本学会にお力添えいただけますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

一般社団法人 日本遺伝性腫瘍学会　役員一覧(2025年6月～)

理 事 長	
平田　敬治	産業医科大学　第一外科
副理事長	
下平　秀樹	東北医科薬科大学　医学部　腫瘍内科学教室
山口　達郎	がん・感染症センター 都立駒込病院　遺伝子診療科
理　　事	
有賀　智之	東京科学大学　総合外科
奥川　喜永	三重大学医学部附属謬院　ゲノム医療部
川崎　優子	兵庫県立大学　看護学部
久保　真	九州大学病院　乳腺外科
隈元　謙介	香川大学医学部　ゲノム医科学・遺伝医学
小林　佑介	筑波大学医学医療系　産科婦人科学
田辺　記子	埼玉医科大学総合医療センター ゲノム診療科
中島　健	大阪国際がんセンター 遺伝子診療部遺伝性腫瘍診療科
中山　佳子	信州大学医学部　保健学科
平沢　晃	岡山大学病院　臨床遺伝子診療科
門馬　智之	福島県立医科大学　遺伝診療部
吉田　玲子	埼玉県立がんセンター　遺伝科
監　　事	
青木　大輔	医療法人財団順和会 赤坂山王メディカルセンター
石川　秀樹	京都府立医科大学　分子標的予防医学 大阪研究室
鈴木　眞一	JCHO二本松病院

学術集会開催報告

❖第 31 回学術集会を終えて

第 31 回日本遺伝性腫瘍学会学術集会

会長　平田　敬治
産業医科大学 第 1 外科
織田　信弥
国立病院機構九州がんセンター 腫瘍遺伝学研究室

去る 2025 年 6 月 20 日、21 日の両日、第 31 回日本遺伝性腫瘍学会学術集会を北九州の地で開催させていただきました。両名で議論を重ねながら、約 1 年にわたり準備を進めてまいりましたが、無事大過なく終えることができ、安堵しております。これもひとえに、会員のみなさまのご協力、ご指導の賜物と存じます。深く御礼を申し上げます次第です。

今回の学術集会は、2013 年に内野眞也先生、三股浩光先生が大分で開催されました第 19 回学術集会に続く、2 度目の九州での開催でした。そこで、テーマを「地域と、社会と、切り拓く。」といたしました。地域の診療ネットワークなどを通じて、各地域の状況を共有するだけでなく、ゲノム医療については、国を超えた地域の違いにも光を当ててみました。また、本学会は早くから、遺伝性腫瘍の当事者コミュニティーと交流し、対話を重ねてまいりましたが、今回は、当事者のみなさんのみならず、行政や民間企業といったさまざまな方面から多くのご参加をいただきました。「普段聞くことのない声が聞けた」と、ご好評をいただきました。このように、地域というヨコ軸、社会というタテ軸の 2 つの方向性において、垣根を超えた (Beyond the Borders) 有意義な議論が交わされたように感じておりますが、反省点も少なくありません。過密なプログラムにお叱りの声も寄せられましたし、会場はしばしば立ち見で溢れてしまいました。運営の不行き届きをお詫び申し上げ、平にご容赦を願い上げます次第です。

第 31 回は、このように多くの課題を残しつつも、新しい試みにも取り組んでみました。今後も、本学会学術集会がより一層横断的な議論の場として発展することを祈念いたしまして、次回会長の愛知県がんセンター研究所　井本逸勢先生にバトンをお渡しいたします。

❖学術集会トピック＆感想

▶遺伝医療領域

植野さやか
藤田医科大学医学部　先端ゲノム医療科

本学術集会では、ワークショップ4「遺伝性腫瘍の着床前遺伝学的検査（PGT-M）」と題したシンポジウムが行われました。最初に長崎大学の三浦先生から、PGT-M の審査体制および審査の現状と課題についてのご講演がありました。疾患名だけでなく各家系における発症者の状況も含めて総合的に判断する体制があること、バリアントの正確な評価が欠かせないことを再度認識いたしました。また、今後は日本産科婦人科学会の中での議論・審査だけでなく、公的プラットフォームを構築し広く議論を深めていく方向性であることを伺いました。

IVF なんばクリニックの中岡先生からは、採卵・体外受精を含めた一連の流れと、実際に PGT-M を実施された方のその後の選択についてお話しいただきました。同施設の小西先生は妊孕性温存療法を実施した乳がん患者さんを対象に行ったアンケート調査で、まだ PGT-M の認知度は高くないものの、約半数の患者さんが PGT-M が実施できる体制を希望していることを示されました。一方で、がん研有明病院の新川先生からは、がん診療に従事する医療従事者における PGT-M の認知度が限定的であることが示され、遺伝性腫瘍診療に携わるわれわれから患者さんへの情報提供の重要性を痛感いたしました。FMC 東京クリニックの田村先生からは、海外における PGT-M の考え方についてのお話があり、PGT-M に対して多様な考え方があるため、1つの考えに収束することは難しくてもお互いの考えを知って認め合い議論を深めていくことが重要であり、費用や手続きなどの課題解決も含めて当事者に寄り添った体制が整備されていくことが必要であると感じました。

会場は大変な熱気に包まれるとともに多くの立ち見の聴講者が出るなど、本分野における関心度の高さが伺えるシンポジウムでした。

▶乳腺領域

八幡　美紀 / 中津川智子
がん・感染症センター 都立駒込病院　遺伝子診療科

BRACAnalysis® が HBOC 診断に対し保険収載されてから 5 年が経過しました。遺伝性乳がん診療は進展している一方で、本邦での検査は BRCA1/2 遺伝学的検査が中心となっており、MGPT の活用はまだ発展途上と言えます。シンポジウム6「HBOC Updated」では、MGPT 普及により non-BRCA の遺伝性乳がんの拾い上げが進むことや、Genotype によるリスク評価の重要性が増していくことが期待されました。

今年の HBOC 乳がん診療のトピックの一つとして、MyChoice 診断システム® が乳がんに保険適用されたことが挙げられます。主な検査対象としては“生殖細胞系列の情報を知りたくないがオラパリブが使えるかどうかは知りたい乳がん患者”であり、サーベイランス対象とはならないことから、検査の特性を説明し、提供することが求められます。

さらに、妊孕性温存療法や着床前診断についての発表では、妊孕性温存療法の選択肢を医療者が提示することの重要性や、遺伝

性腫瘍全般に対するPGT-Mの可否について議論されました。本邦では広く一般的に行われていないとしても、「PGT-Mという選択肢を医療者から教えてほしかった」という患者さんの声があることを、心に留めておく必要があると感じました。

今後も遺伝性腫瘍診療に携わる者として、遺伝性腫瘍と共に生きる患者さんおよびご家族が自分らしい生活を送れるようサポートできるよう努めていきたいと思います。

▶消化管領域のTopics

高雄　美里

がん・感染症センター 都立駒込病院　外科（大腸）

第31回学術集会は「地域と、社会と、切り拓く。Beyond the Borders.」をテーマに、北九州国際会議場で開催されました。30℃を超える暑さの中、会場はそれ以上の熱気に包まれ、活発な議論が展開されました。本学術集会では、大規模な症例解析や病院単位での取り組み、さらには貴重な症例報告まで幅広い発表が行われました。

シンポジウム4「リンチ症候群 updated」では、リンチ症候群に関する最新の知見が報告され、遺伝学的検査の進歩や遺伝子別の特異性に関する発表がありました。今後、遺伝学的検査に基づく症例の蓄積によってより適切な管理戦略が確立されることが期待されます。ワークショップ5「消化管ポリポーシスの課題」では、FAPに加えSerrated Polyposis Syndrome（SPS）やPeutz-Jeghers Syndromeといったポリポーシスを呈する疾患も取り上げられました。MGPTの普及により、診断困難症例においても診断が可能となってきています。さらに、SPSでは2024年からレジストリ研究が開始され、新たな知見の集積が見込まれます。また、着床前遺伝学的検査（PGT-M）も大きな話題となりました。欧米や一部のアジア諸国では当事者の選択肢として位置づけられている一方、本邦では制度面や費用面における課題が依然として大きいことが明らかにされました。質疑応答では当事者からの発言も多く、社会的関心の高さを実感しました。

当学会は、多診療科の医療者に加え、当事者、企業、行政も参加する点に特徴があります。今回の参加を通して、医学的視点に留まらず多方面から遺伝性腫瘍を考える重要性を再認識し、たいへん有意義な学術集会となりました。

▶小児関連からみた第31回学術集会

岡本健太郎

東京科学大学 総合外科学分野小児外科学担当

小児がんを発症する患児の約10%が生まれつきがんを発症しやすい遺伝的体質を有していることがわかってきており、ゲノム医療の普及により診断される機会も増えています。このように小児がんの中には、Li-Fraumeni症候群をはじめとして遺伝性腫瘍として有名なものも多く含まれております。今回の学術集会において小児に関連する発表は、Li-Fraumeni症候群、HBOCに関する遺伝カウンセリング、消化管過誤腫性ポリポーシス、小児遺伝性腫瘍レジストリパイロット研究、子のMGPTを契機とした発表など、絶対数としては決して多くはありませんでしたが、幅広くそれぞれの分野における発表を見受けられました。とくにLi-Fraumeni症候群の作業部会セッションでは、立ち見が出るほどの注目度の高さでした。

私事ではありますが、本学術集会でvon Hippel-Lindau病について発表させていただきました。そして、2年後の2027年には、上司である有賀智之先生が学術集会長を務める関係もあり、当学会においても小児分野のかかわりをさらに強く発展させていければと思っております。

遺伝性腫瘍は小児の時期からかかわりのある疾患概念です。小児に関する遺伝性腫瘍分野はまだ未開拓の部分が多く、それだけに大きく羽ばたける余力があると思います。これからも当学会の発展と共に小児のセッションが拡大し、関係者も増えていくことを望むと共に微力ながら協力していきたいと思います。

▶遺伝カウンセリング領域のTopics：“ネットワーク”とはすなわち“ピアサポート”である！

勝部　暢介

岩手医科大学医学部　臨床遺伝学科

公益財団法人星総合病院　遺伝カウンセリング科

私は今回の学術集会で、シンポジウム5「遺伝・ゲノム医療と地域ネットワーク - 九州家族性腫瘍ネットワーク企画」にて登壇する機会をいただき、東北地方における遺伝性腫瘍のネットワークとして「東北家族性腫瘍研究会」と「ジェネティックハンド」についてご紹介しました。座長は松本 恵先生（長崎原爆病院）と川野 純子先生（相良病院）で、シンポジストは以下の通りです（発表順）。

- 川野　純子先生（相良病院）
- 山本　弥寿子先生（四国がんセンター）
- 勝部　暢介（星総合病院）
- 藤田　裕子先生（姫路赤十字病院）
- 石岡　宏太先生（がん研有明病院）

各演者からそれぞれ九州・沖縄、四国、東北、西日本におけるネットワークの詳細、および物理的距離を乗り越えるためのオンライン遺伝カウンセリングの試みについて発表があり、活発な議論が交わされました。その中で、座長のお二人がお話しになった「今回のシンポジウムは、医療者にとってのピアサポートである」というフレーズが強く心に残っています。ピアサポートには「同じ問題や状況をもつ人が、情緒的に支え合い、その問題に適切に対応するための知識を共有していく関係」といった定義があります。私が報告した当事者会の活動はまさにピアサポートの場ですが、一方で医療者のネットワークもまたピアサポートである、ということを改めて感じる機会となりました。

遺伝カウンセリングを提供する側もされる側も、やはり“繋がり”が大切なのだ、という思いを胸に、今日も東北の地で遺伝性腫瘍の診療や研究に臨んでいます。

▶市民公開講座「がんって遺伝するの？」

秋山　泰樹

産業医科大学　第1外科

このたび、第31回学術集会2日目に、メディア等でもご活躍であり、患者塾も好評な小野村健太郎先生（おのむら医院）の司会のもと、「市民公開講座」が開催されました。今年は講演形式ではなく、元アナウンサーでもある小野村先生の仕切りで、登壇者と参加者の双方向コミュニケーション形式で行われました。

本公開講座は、第31回学術集会および当学会学術・教育委員会による主催、厚生労働科学研究費補助金がん対策推進 総合研究事業「ゲノム情報に応じたがん予防にかかる指針の策定と遺伝性腫瘍に関する医療・社会体制の整備および国民の理解と参画に 関する研究」班による共催、患者塾 / 毎日新聞の後援、九州家族性腫瘍ネットワークの協力により開催されました。

登壇者は、ひまわりの会（リンチ症候群患者家族会）柴田良子様、日本赤十字社長崎原爆病院乳腺・内分泌外科　松本恵先生、厚生労働省健康・生活衛生局がん・疾病対策課　箕浦祐子先生、遠賀中間医師会おんが病院院長　矢田親一朗先生、産業医科大学病院遺伝カウンセリング科認定遺伝カウンセラー　川﨑祐也先生および秋山というメンバーで行われました。

遺伝性腫瘍に対する不安や疑問点、問題点について活発なディスカッションが繰り広げられました。会場からも積極的なご発言やご意見をいただき、予定の2時間はあっという間に過ぎてしまうほど、大変充実した時間を皆様と共有できました。なお、当日の内容は、九州地方版ではありますが毎日新聞に掲載されました。

▶シンポジウム２「遺伝・ゲノム医療を支える遺伝性腫瘍コーディネーターの役割 ー HTC/FTC制度委員会企画」

青木美紀子　聖路加国際大学

堀　伸一郎　姫路赤十字病院

第31回学術集会において、「遺伝・ゲノム医療におけるコーディネー

ターの役割 - HTC/FTC 制度委員会企画」と題したシンポジウムの座長を務めました。本シンポジウムでは、遺伝性腫瘍コーディネーター（HTC）制度の現状と展望、ならびに臨床における具体的な活動や課題について 4 名の演者よりご講演いただきました。

川崎優子先生（兵庫県立大学）からは、制度発足から現在までの経緯と会員調査に基づく制度改変の報告がありました。松本仁美先生（兵庫県立はりま姫路総合医療センター）からは、HBOC 診療体制整備を通じた HTC の役割と地域中核病院での多職種連携の実践が紹介されました。柘植薫先生（香川大学医学部附属病院）からは、個別化医療の進展を背景に、遺伝情報共有や SDM（共有意思決定）の重要性を踏まえた HTC 活用の現状と課題が示されました。山根美代子先生（姫路赤十字病院）からは、がん看護専門看護師として HTC 資格取得を目指す取り組みと今後の展望についてお話しいただきました。

ディスカッションでは、HTC が病院に存在することの重要性が改めて認識され、院内の看護職に資格取得を促す声も寄せられました。制度の基盤整備に留まらず、HTC の役割や多職種連携の意義に関して多くの示唆が得られ、今後の遺伝・ゲノム医療の発展において HTC の果たすべき役割の大きさを共有する機会となりました。

▶シンポジウム 3
「MGPT の現在とこれから」

平沢　晃
岡山大学学術研究院医歯薬学域 臨床遺伝子医療学分野

海外では 2014 年頃より、遺伝性腫瘍症候群の診断において多遺伝子パネル検査（MGPT）が主流となっていますが、わが国では薬機法で承認された MGPT は存在せず、現時点では保険適用外です。本シンポジウム「MGPT の現在とこれから」では、開会式に引き続き 4 名の演者に講演いただきました。

最初に、吉田玲子先生（埼玉県立がんセンター 遺伝科）より、「Are you ready for MGPT? - 遺伝性腫瘍症候群に関する多遺伝子パネル検査 (MGPT) の手引き」と題し、本年 3 月に発刊された『遺伝性腫瘍症候群に関する多遺伝子パネル検査（MGPT）の手引き 2025 年版』について解説いただきました。

次に、木村俊成先生（独立行政法人医薬品医療機器総合機構 プログラム医療機器審査部）には、「MGPT の承認申請にあたり求められる性能評価」との演題で、今後想定される MGPT の医療機器承認審査の観点から、概念的な要求事項や性能評価における課題を整理していただきました。

続いて、桑田 健先生（国立がん研究センター東病院 遺伝子診療部門）からは、「マルチジーンパネルによる遺伝性腫瘍診断 - BRANCH 研究での検討」と題し、研究代表を務める BRANCH 研究における、MGPT の機器承認を目指した取り組みについてお話しいただきました。

最後に、岩谷 胤生先生（聖マリアンナ医科大学 乳腺・内分泌外科学）より、「費用対効果を勘案した MGPT の効率的な利活用方法の検討」との演題で、がん予防の観点から、MGPT による遺伝性腫瘍スクリーニングの費用対効果に関する考察をいただきました。

上記の手引きの発刊を契機とし、遺伝性腫瘍症候群の診療体制の強化、医療者の人材育成、国民との情報共有といったさまざまな取り組みを今後さらに進めていく必要があると考えます。

お知らせ

❖第 32 回日本遺伝性腫瘍学会学術集会　会告

■テーマ：ゲノム情報のその先へ
■会　期：2026 年 6 月 12 日（金）～ 6 月 13 日（土）
■会　長：井本逸勢（愛知県がんセンター　研究所長）
■場　所：ウインクあいち
（名古屋市中村区名駅 4 丁目 4-38）
■ＨＰ：https://www.congre.co.jp/jsht2026/index.html

❖第 4 回アドバンストセミナー（速報）

■テーマ：未定
■開催日：2026 年 2 月 21 日（土）
■場　所：相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明

編集後記

今年の夏も猛暑が続き、この暑さは Newsletter が刊行される頃には少しは和らいでいるでしょうか。

さて、今回は、学会理事の新体制のご案内と 6 月に行われた学術集会の特集を中心とした構成となりました。梅雨の合間の晴天のなか小倉駅に降り立ったとき、“ようこそ北九州へ” と書かれた学術集会の看板を見て、「いよいよ今年も始まるんだな」とワクワクしたのを覚えています。コロナ禍以降では初めての現地のみでの開催で、どのセッションを聞きに行こうかとても迷いましたが、その分、会期中はより一層集中していたと思います。残念ながら参加できなかった会員の皆様にも、たくさん議論や情報収集ができた会員の皆様にも、広くお届けできればと思います。

末筆ではございますが、お忙しいなか Newsletter にご寄稿いただきました先生方には、心より感謝申し上げます。

（広報委員：田代真理、宮脇聡子、金子景香）